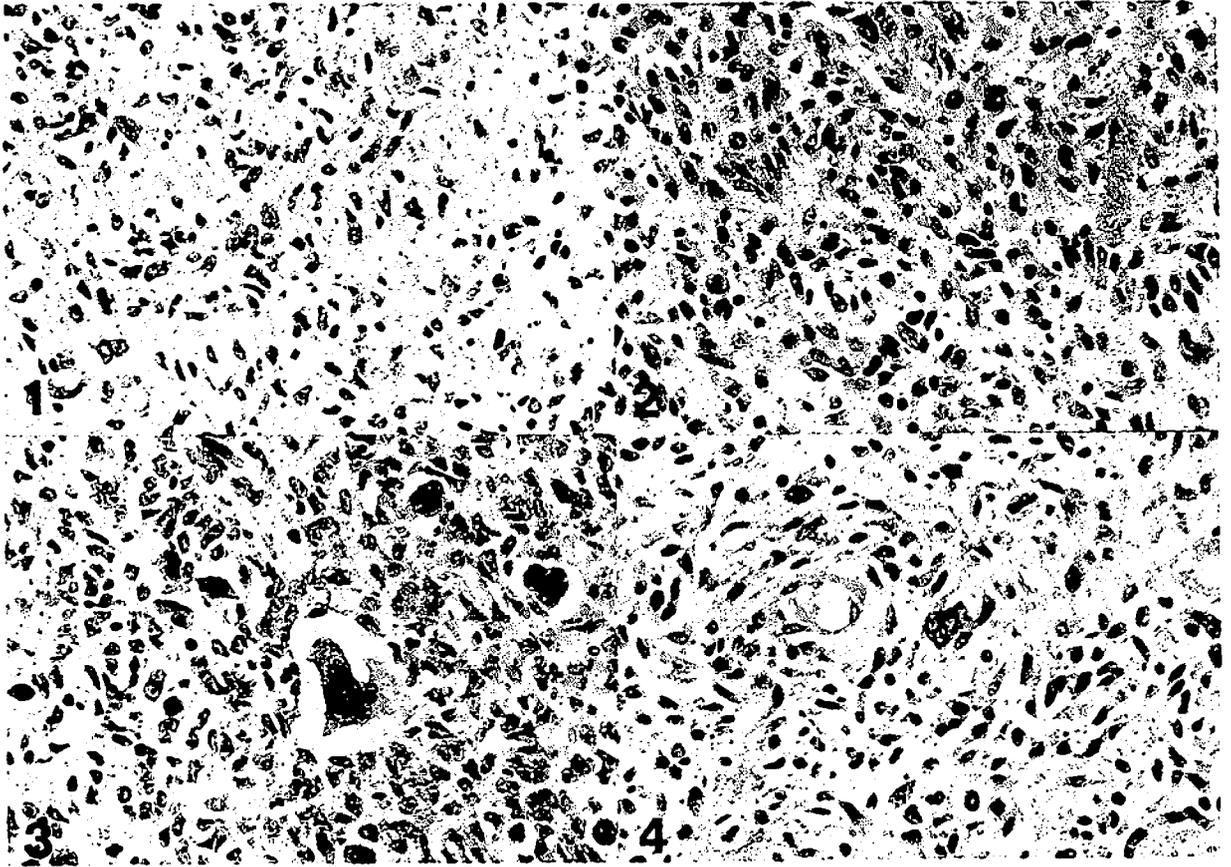


イヌの右大腿部腫瘍

日本大学農獣医学部獣医病理学研究室出題 第22回獣医病理学研修会標本No.360



動物：イヌ，雑種，8才，雄，体重20kg。

臨床的事項：主訴は疼痛と跛行を呈し，次いで腫脹が認められた。初診時（昭和54年12月10日）右大腿部は著明に腫大し，biopsyにより腫瘍と診断された。昭和55年3月14日，他部への転移のおそれから高位断脚術を施した。しかし，同年11月17日の診察で，腎部に再発し，X線像から肺転移を確認した。そして，昭和56年3月20日に死亡した。

内眼的所見：断脚時の大腿部は顕著に膨脹性に腫大し，その内部には軟弱な脂肪様の組織が存在していた。また腫瘍組織は比較的充実性で，骨格筋との区別は明瞭であった。腎部の再発腫瘍は拳大とアヒル卵以上の大きさの2個あった。他部への転移は肺にのみで，左肺の心葉，中葉，後葉などに直径約3～5cmのもの3個と，小腫瘍が集合したもの1個あった。右肺では後葉に直径約1～2cmのもの5個あった。以上の腫瘍は比較的硬固なものと同様なものがあり，断面は乳白色～灰白色で充実性で，中央部は壊死・軟化し，出血を伴っていた。

病理組織学的所見：本腫瘍の組織像は高度な多形性を示し，部位により脂肪肉腫，線維肉腫，多形性横紋筋肉腫の像を呈している。脂肪肉腫の像を示す腫瘍細胞は原形質に大きな空胞を形成し，核は線維芽細胞様で，大小，形などが不整で，なかには合胞性に巨細胞化を思わせる細胞もみられる（写真1）。線維肉腫の像を呈する部では，

線維芽細胞様の種々なる形をした腫瘍細胞が充実性に密に増殖している。また粗な増殖部では線維芽細胞様の腫瘍細胞と，小型の円形細胞が種々なる割合で混在している（写真2）。また，腫瘍細胞は不整な配列を示すなかに，部位により細長い紡錘形の細胞が放射状に，あるいは束状に配列している。これら腫瘍細胞の胞体には微小～小空胞の形成が種々なる程度に認められる。また，巨大細胞も混在し，小空胞形成を伴っている。一部であるが細血管を中心に渦状に増殖している像も認められる。多形性横紋筋肉腫に類似している組織像では，わずかな胞体をもつ小円形細胞から紡錘形に至る腫瘍細胞，更に巨細胞や巨大細胞など高度な多形性を示す腫瘍細胞からなり，胞体には微小～小空胞の形成が認められる（写真3）。

肺の転移像は，原発部とほぼ同様な組織像であるが，一部に骨形成像があり，この部の腫瘍細胞の形は多形性横紋筋肉腫の像と類似している（写真4）。その他，Sudan IIIにより腫瘍細胞内に脂肪が確認された。また，腫瘍組織は膠原線維などに富み好銀線維はよく発達し，腫瘍細胞を取り囲んでいる。ごく一部にヘモジデリン沈着もあった。

診断：以上の所見から，本腫瘍細胞は高度の多形性を示し，間葉性混合腫瘍などが疑われるが，脂肪が証明されたので，多形性脂肪肉腫 Pleomorphic liposarcoma と診断される。

写真1～4：HE染色，×200。